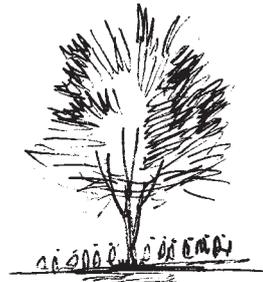
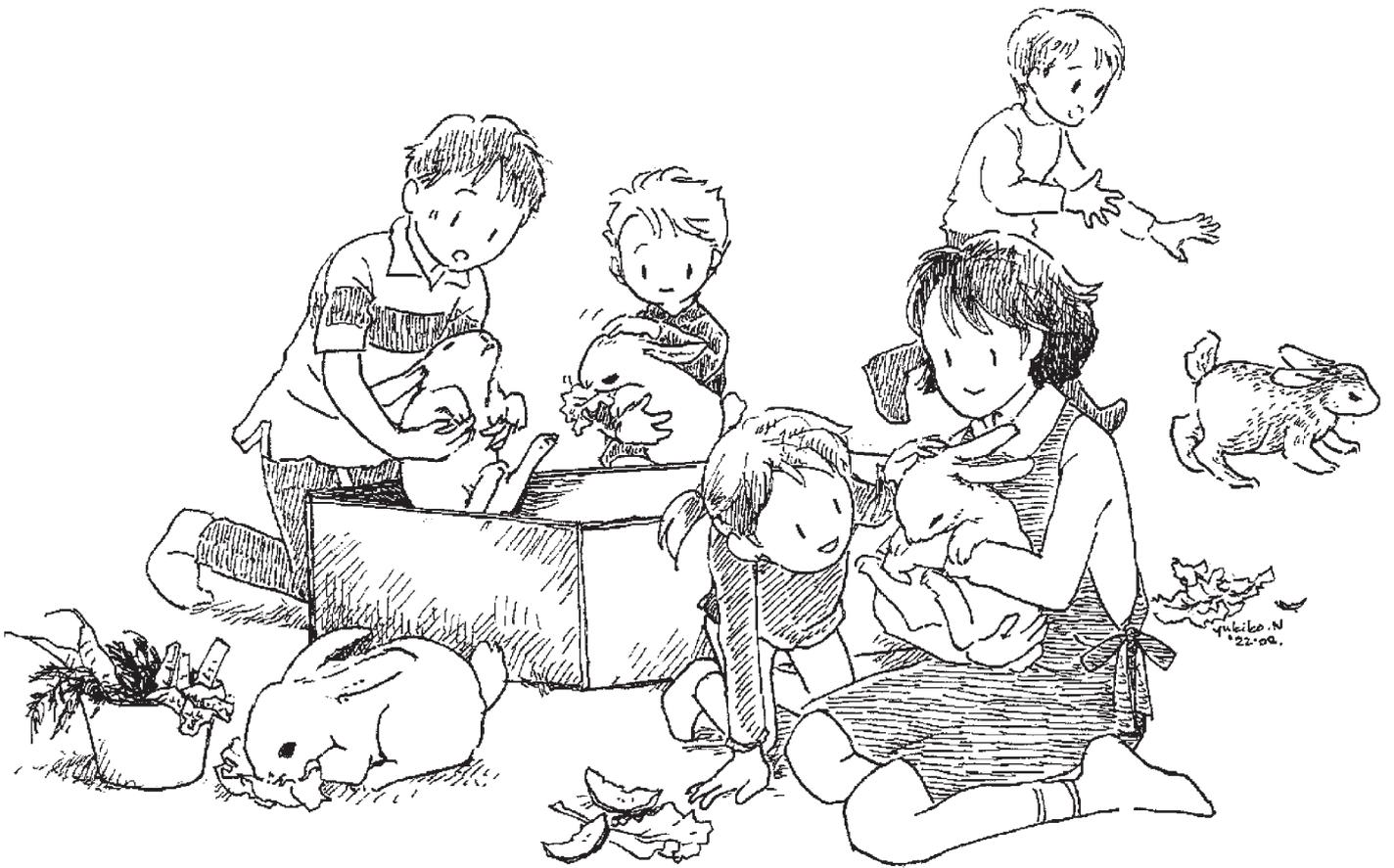


光の子



No.205 2022.5.5

●年間聖句 イエス・キリストは言う：私のもとに来る人を、私は決して追い出さない。
(ヨハネによる福音書6章37節より)



「新しい家族」

表紙絵・中島由起子

その中に

黛 まどか

追悼・東日本大震災十年

暮れかぬる三月十一日の海

桜貝ひとつ拾ひてひとつ捨つ

一本のカーネーションを買ひてより

父の日のことさら白き雲ひとつ

明易や残り香のごと夢の父

万緑を登りきつたる一輛車

その中に母の辺を舞ふ蛍かな

光の子どもの家を離れて思うこと

牧野 由起子

私が光の子どもの家を退職して1年経つ。「1年経つたら『光の子』の巻頭書を書いてください」とお願いしたの、覚えていますか……？」と原稿依頼の連絡があった。すつかり私の記憶からは抜けていて、正直「そんな約束したかなあ」と思ってしまった。

テーマは「光の子どもの家を離れて思うこと」。これを意識して真つ先に感じたことは、「離れた」という実感があまりなかったことだ。今でも、竹花家に行き「ただいま」と玄関を開ければ、いつもの顔ぶれが出迎えてくれて、近況をたくさん話してくれる。たまに顔を出すと卒園生はこんな気分なのかなと思いつつ、ちよつと長めの休暇をもらっているような感覚である。

とはいえ、私は子どもたちに毎日「おかえり」と言ったり、卒園生たちに「たまに

は、ご飯食べにおいでよ」と誘ったりする立場ではなくなつたのである。

先日、数か月ぶりに顔を出すと中学生になつた日向がおり菓子を作ってくれていた。

ランドセルを背負つていた日向は毎日見ていたけれど、中学校に入学してからは数回しか会っていないため、制服姿の日向を見るのは私にとつてはまだまだ新鮮であり、不思議な感じがする。

そして、日向から「バレンタインにね、好きな人にチョコあげたんだよ」という話を聞き、一緒に居るときよりも成長のスピードを速く感じた。

もちろん、日向の成長は大きなものだが、それだけではない。離れている時間は、時の流れの感じ方も変えてしま

私にとって、「共に生活すること」について多く考えさせられた、光の子どもの家での16年間だつたと思う。その16年間は、児童養護施設職員としての働きだけではなく、自らの暮らしそのものに近かつた。

人間関係は距離が近ければ近いほど摩擦が生まれ、長く居れば居続けるほど関係性はより濃くなつていく。その繰り返しの中で、相手を思つたり、大切にされたりする経験を積み重ねていく。

それらが子どもたちの安心や成長の基盤になるよう、私たち職員は試行錯誤するわけだが、その経験の積み重ねは子どもたちだけではなく、職員の間も同じだつたと思う。たくさんの思いが詰まつた誕生日会やクリスマス祝会だけでなく、今日も明日もあさつても、いつものメンバーで「おはよう」から始まつて「おやすみ」で終わる生活は、当たり前のように見えて当たり前ではないということ、光の子どもの家から離れてみて感じて

物理的に離れても、簡単に離れることはできない「暮らし」がそこにあり続ける、ということ。

子どもたちにとつても、帰る場所があるということ、大きな意味を持つ。光の子ども家から離れても、訪れれば出迎えてくれる子どもたちと職員の方々、以前と変わらぬペースで連絡をくれる卒園生、一緒に居るときには分かんなくなつたり、気づかなかつたりしても離れてから感じるつながりというのもある。

距離が近すぎて、言えなかつた「ありがとう」や「ごめんなさい」もあつたように思う。児童養護に携わる者として、たくさんの気付きや学びを「暮らし」を中心とする光の子どもの家から得ることができたことは、私にとつて大きな財産である。

これからも、少し離れた場所から光の子どもの家をひっそり応援し、凶々しくも埼玉の「帰る場所」だと思つて時々顔を出させてもらえたらと思つている。

人間この愚かなるもの

老健施設紅寿の里 施設長 仙道 富士郎

この号で、ロシアのウクラ
イナ侵攻について書くこと
は、早くから心に決めてい
た。ただ、ある程度戦況を見
極めてからという想いも重な
り、時が経った。しかし、考
えてみると、私がいま言おう
としていることは、戦争の結
果についてあれこれ言い立て
ることではなく、こんなこと
が、今の世に起こってしまった
たことに対する悲嘆なので、
戦況などには関係のないこと
だったのである。

ロシアとウクライナの長
い、因縁のある歴史的な関係
を知らずに、ウクライナ侵攻
をとにかく言うのは間違っ
ているという人たちがいる。今
回のことを歴史的に論評し
ようとすれば、その通りであ
ろう。ロシアのやり方の非人
道性を挙げる米国にしてから
が、我が国を降伏に追い込む
ための最後の手段として広島
と長崎に原爆を投下し、東京

の無差別攻撃を行ったわけだ
し、我が国の中国での民間人
虐殺も黙視できるものではな
かったはずである。これらの
事柄と今回のロシアの取った
行動の間に、倫理性の上で、
本質的な差異は認められま
い。まさに、歴史は繰り返す
のである。

しかし、しかしである。5
千万人以上の人間が殺戮され
た第二次大戦を経て、もうこ
のようなことを繰り返さない
と、人間たちは誓いあったの
ではなかったのか。もちろ
ん、第二次大戦の後にも、朝
鮮戦争あり、ベトナム戦争あ
り、戦争による殺戮は繰り返
されてきたわけだが、若者た
ちを中心に反戦運動も盛ん
なり、戦争の名のもとに、生
命を奪うことの愚かさを少し
は人間も理解するようになって
きたと合点していたのだが――

今回のなりゆきでさらに気

が重いのは、プーチンの独裁
政治が一定程度ロシアの人た
ちの支持を受けていることで
ある。やはり、20年以上一人
の政治家が国の中心に居座り
続けると、その周りにいびつ
な人の繋がりが生まれ、それ
が基礎となつて、人々の心理
が一定方向に操作されていく
ようである。中国でも同じよ
うな危険性が感じられてなら
ない。学生時代、社会主義社
会から共産主義社会への道を
夢見た一人として、社会主義
と呼ばれた時代を経たロシ
ア、そしていま社会主義と称
している中国の政治が、明ら
かに独裁政治への道を進んで
いくのを見ているのは辛いこ
とではある。構造的に貧富の
差を作り出す資本主義社会が
良いとも思わないが、AIが
人間の行動のかなりの部分を
模倣できるようになった今の
世において、国益のためとい
う大義を掲げて民間人の大量
虐殺を試みる独裁者を何とい
う言葉で表現したらいいの
か。

まさに、「人間この愚かな
るもの」である。そして、こ
の愚かなるものの一人とし

て、自分を標的にしなければ
ならないことを、最近感じさ
せられた。事は、コロナ対応
の中で起きた。何十年も前に
研究していた細胞が、コロナ
の重症化に関与していると直
感し、若手の研究者に話を持
ちかけたが、その呼びかけは
結果的には失敗に終わってし
まった。がん手術を受けた直
後の朦朧とした意識の中で、
「それなら、自分の考えを専
門誌で示して、世界の研究者
に問うてやろうじゃないか」
と考え、論文に手を付け始め
た。退役して時間の経つ自分
では論文の投稿などについて
は何もできないので、そのこ
とについては、弟子筋の二人
にお願ひした。私の論文が、
ほぼ終わりがけた時、私は論
文制作上の大きなミスを犯し
てしまった。弟子の一人が
「先生！このやり方ではだめ
じゃないですか！」とメール
をよこした。プライドを傷つ
けられたと思った私は、罵詈
雑言のメールを返した。「弟
子にそんなことを言われてた
まるものか、もういい。も
うお前などは付き合わな
い」。弟子から返ってきたメ

ールには「そんなに怒らないで、頑張りましょう。先生が病氣療養中頑張っていたのは、よくわかっています。だから、より立派なものにした

不思議

彫刻家 中島 睦雄

世の中には不思議な事がたくさんある。

自分の身のまわりにも不思議な事が多い。

それは自分の認識の甘さがそう思わせているという事でもあるのか。

最近の不思議な出来事。

私の卓上には色々な物が置いてある。少し広めの卓ではあるが、ひよいと手を伸ばせば何でも取れる。鉛筆あり、消しゴムあり、ハサミあり、ノートあり、ボールペンあり、風邪薬あり。一人暮らしの私には非常に便利な卓である。一番手前だけは物は置かない。食事もこの卓上で済ませるからである。普通の人の

かつたのです。」とあつた。世界がどうのこうのと大きなことなど言えない愚かな自分であることを覚えざるを得ない。

生活の中では、このような状態は許し難いものであろう。

この食卓にて不思議な事が起こつた。

或る時、小さなパックに入つたイチゴを食べた。

赤い大きなイチゴはとても美味しかった。これをその場では全部食べずに3個ほど残しそのままにしておいた。翌朝、見てみるとこのイチゴの1個の端が少し削られたようになつていて、中の白い部分が見えていたのである。

オヤ?と思つた。誰が食べかけたんだらう。虫ではこのような食べ方はしない。そこで、試しにそのままにしておいた。すると翌朝には食べかけのイチゴが無くなつてい

ではないか。これはネズミかな?と思つた。しかしこの小さな部屋にネズミが出たことは未だかつて無い。唯一部屋を仕切つているガラス戸の一番下には厚紙で作つたうちの猫、クロ専用の出入り口があるのだが、今はもうそのクロも居ない。余所の猫だろうか?しかしである。その厚紙には生前、妻が書いた「余所の猫はここから入れません」がある。したがって余所の猫が入つてイチゴを食べるといふことはない筈である。

しかし、ネズミだったらどうだろう。「オレは猫じゃあねえよ。ネズミだよ」とでも言つて入つて来るのだろうか。

そこで今度は試しにお菓子を置いてみた。あまり堅くない物にした。翌朝見てみると、半分だけ食べ残っているのである。こうなると、食べに来るのはやはり小動物か何かだと思えてきた。しかし、家の中にはそのような生き物は居ない筈。不思議というしかないのである。



巣ごもり母子

共育ちカンガルー日記 (62)

近藤 みちる

この半年間、優希と二人でずっと巣ごもりをしていた。コロナ禍だから、というわけではない。中二の九月から、

優希が完全に学校に行けなくなつてしまつたのである。その頃に受けたバウムテスト(心理テスト)の結果を臨床

心理士から告げられた時、私は大きな衝撃を受けた。

「優希ちゃんの心は今、四歳まで退行しています。過剰なストレスが長くかかり続けていたからでしょう。今はともかく安全な場所ですっかりと優希ちゃんを守ってあげなくてはならない状況です」

いや本当は、もうずっと前から学校は上手くいってなかったのだ。遡れば一年生の冬になる。穏やかな気性のはずの優希が、先生にやたらと苛立って授業中に声を荒げたり、物に当たったりと、そんな報告を学校から受けるようになったのだ。二年生になると授業中にしばしばパニック（興奮して自制が効かなくなり大声で騒いだり、暴れたりする状態）を起こすようになった。夏休みが明けると徐々に登校を渋るようになり、やがて学校へ行かなくなってしまう。チック症状や不安発作、幻聴といった精神症状も出現し、主治医からは「適応障害の一步手前」と言われ、向精神薬も処方された。

この状況に、もう仕事だの何だのと言っている場合ではないと、私は腹を括った。優希が四歳まで退行してしまったというなら、母親である私もそこまで戻ってやらなければなるまい。そしてそこからもう一度、優希と共に歩み直してあげる他はないのだろうと。こうして私たちの巣ごもり生活が始まった。

その頃優希は、向精神薬の影響もあつてか、強い眠気と倦怠感のために一日のほとんどをベッドの上で過ごしていた。悪夢にうなされたり、ちよつとした物音に怯えたり、幻聴に悩まされたりもしていた。私にしてやれることは、ただただ傍に居続けることだけだった。外界とは隔絶された、全くの二人きりの時間と空間。まるで優希が本当に四歳児だった頃にタイムスリップしたかのようだった。

あの頃はまだ、優希に言葉らしい言葉がなかった。一度だけ、優希とおしゃべりをしていて夢を見たことがあった。翌朝目が覚めて、それが夢だと気づいた時、どうにも涙が止まらなかつた。あの頃の私たちには何も見えていなかった。巢の一步外は真っ暗

闇で、どちらに向かつて羽ばたいていけばよいのかもわからず、うずくまり、心細さに震えていた。

十年ぶりに戻ってきた懐かしい古巣は、十四歳の優希にはいかにも手狭だった。それでも優希はその温もりの中じつと身をうずめながら、傷ついた羽を休めている。ここがどこよりも安全で安心な場所だということを肌で分かっているからである。

だが今の優希はあの頃の優希ではない。外には自由に羽ばたける世界があつて、そこがどれほど広く、深く、そして眩い光に満ち溢れているのかをよく知っている。そして言葉がある。拙いなりに思いを伝える術を獲得した。夢に泣いていたあの頃から見れば、今の優希は奇跡そのものではないだろうか。

優希に障害があると知った時から、私の中にはずつと「優希を自立させなければ」という気負いがあつたように思う。だが古巣は私に教えてくれた。「自立」とは成長の結果であつて、決して誰かが「させる」ものではないとい

うことを。親と一緒に生きていくだけでいいのだ。

優希の生きる力を信じよう。ただ傍にいて、待っていてあげよう。優希がいつか自らの力で、再び外の世界へと巣立っていくその時を。

私たちの巣ごもり生活はこんなふうにして半年ほど続き、優希がようやく外の世界に目を向け始めた頃、どこもかしこもすっかり春になっていた。優希が大好きな季節である。

そして三年生を迎えた優希は、古巣の周りで春の光と風を受けながら、ゆつくりとゆつたりと羽を広げ始めている。

補助輪をはづして光る風の中
みちる



光の子どもの家の事業計画 (5)

行事委員会

児童指導員 新吉屋 健太

【行事委員会とは】

行事委員会は2021年度に発足しました。それ以前は「指導員会議」と称する担当の子どもをもたない男性職員の集まりが、行事の計画を扱っていました。

時代が変わり、光の子どもの家の責任担当制のあり方や職員体制も変化しました。現在、行事の大きな方向性は運営委員会が打ち出し、具体的な計画や実施は行事委員長を核としながら、行事ごとに実行委員を募って実施する形を模索中です。

子どもが光の子どもの家から旅だつた後も思い出に残る行事となるよう、活動に力を入れていきます。行事の計画段階では、職員同士のコミュニケーションを大切に、今までにないプログラムを作っていくと思います。

【行事の紹介】

ここからは、光の子どもの

家の行事をご紹介します。

内容はコロナ禍以前の「本来ならこうやりたい」というもので、現在行えているものと異なる部分があることをご了承ください。

誕生会

子どもの誕生会は、それぞれが生活している家で1回やります。加えて、光の子どもの家の全体の誕生会を毎月開いています。設立当初からの「祝い事は何回あつてもいい」「全員でお祝いしたい」という思いから、そのようなになっています。

進級進学祝いの会

進学の節目を迎える子どもが主役になります。幼稚園の園服、小学校の黄色帽子とランドセル、中学高校の制服姿のお披露目です。

子ども祭り

1951年5月5日の「児童憲章」制定を記念した行事です。子どもの願いを中心に

据えて、子どもが準備したゲーム、友人や地域の方を招いたバーベキュー、外部の楽団の演奏などを楽しみます。
小さくても大バザー

もともとは、行政が規定する定員外の職員を確保する資金を自ら調達するために始めた行事でした。寄贈品のバザーだけでなく、後援会や支援者の出店もあり、地域の方と交流する大切な機会でもあります。

夏休みオープンング&

夏休みさよならパーティー

夏の夕方を楽しみながら、学校の長期休みの前後に気持ちを切り替えます。

夏休みの宿泊行事

家ごとに企画する旅行と、小学校低学年・高学年それぞれの横割り行事があります。

感謝の集い

支援してくださる方をお招きし、日頃の感謝を伝える会です。11月3日に行います。クリスマス 光の子どもの家が大切にしているものです。詳細は別稿に譲ります。

餅つき

年末に杵と臼を使ってつきます。ただ、それだけだと量

が足りないので餅つき器もフル稼働です。当日の昼食にみんなが集まって食べ、のし餅を各家に配って新年にも食べます。

正月気分をぶっ飛ばそう会

すき焼きを食べ、3学期に向け英気を養います。

合格お祝い会

地域の学校に通う小中学校と違い、高校進学は自分で選んだ道に進む節目です。悔しいのないように頑張つてほしいという願いを込めて祝います。

その他、行事委員会の分掌ではありませんが、後援会行事として「うどん打ち」などがあります。

これら行事の多くは、光の子どもの家ができた当初から続いてきたものです。しかし現在、コロナ禍の中で行事を中止・縮小したり、従来のやり方を見直さなければならぬことが続いています。

中高生は部活やアルバイトで忙しく、職員にもそれぞれ事情がありますが、できるだけみんなで楽しめる行事が、できるように工夫していきたいと思えます。

登校の試行錯誤

児童指導員 黒川 健一郎

去年の5月くらいからだろ
うか。たった数年の不摂生で
形成されてしまった自身のボ
ディ(笑)に鞭を入れないと、
思っていただけのことをやつ
と行動に移すようになったの
は(笑) 自分の中のスイッチは
不思議と何か特別なきつけ
があるわけではないと自覚し
ているが、あるならば「始め
る」ことなのかもしれない。
小学生の登下校に歩きで付
き添うことにした。小学校ま
での道のりは片道2km、約30
分。往復でそれなりの有酸素
運動が朝と日中の2回も出来
るのではないかと、と疚しい寄の

考えて実行に移した。
初日、戸惑った様子の子ど
もたち。それもそのはず、私
の出勤時間は小学生が登校し
た後で、その時間にはいない
はずなのだから。
今でも出勤時間を変えたわ
けではなく、あくまで自身の
健康のためにしていること。
通学路往復後が出勤となる。
生活もあれこれ組み替え支障
が無いようにした。そのよう
なことを今日までほぼ毎日継
続している。
学校に着くまで平和かとい
うと中々どうして……といっ
た感じだ。



登校班によるその家の子はお
らず、光の子どもの家の子た
ちだけなので、園内保育の延
長線上のようなもの。少しの
いざこざが乱暴なトラブルに
発展しかねない。
これは……、自身の運動に
かまけてる場合ではなさそう
だ。とりあえず学校に着くま
ではお楽しみ要素をと、豆知
識、クイズ、なぞなぞ、しり
とり、学習問題等々あれこれ
試みた。
子どもたちは基本食い付き
が良いが、飽きるのも早く、
それでいて欲しがり屋さん
だ。難問と感じると態度で背
け、「次の問題を出せ〜」「他
の話はないの?」となる。
30分の道のりを毎日それで
保たせるのも楽ではない。早
い段階でこちらもネタが尽き
てしまった。1年生〜6年
生、多様な子どもたちが楽し
く、じっくり考えながらでき
るものはないものか。
ある日咄嗟に思いついたの
は『車は何台通るか当てるゲ
ーム』。交通量の少ないたん
ぼ道が通学路になっており、
車は滅多に通らないが、1本
だけ車がよく通る歩道付きの

道がある。手前の1本道に足
を踏み入れてからその道路に
着くまでに車が何台通るかを
当てる。参加する子たちは事
前に何台通るかを予測、宣言
しておく。
スタートしてからは車をカ
ウントするため、よろしくな
い言動をする子たちもその時
はしなくなる。参加しないと
宣言しつつも、チラ見しながら
らこつそり小声でカウントす
る子(笑)、大きな声でカウン
トし場を盛り上げてくれる子
と、なかなか悪くない雰囲気
になる。
簡単に当たる筈もなく、初
日から「つまんねえ!!」「当
たんねえじゃねえか!」
等々罵声もあつたが、その時
は「当てた喜びもだけど、当
てるまでも楽しむのいいか
もよ。実際、カウントしてい
る時皆楽しそうにしてた。そ
れにチャンスはこれから学校
に行く回数だけあるんだし」
と話した。
それから数日はそれが続い
た。当てる子もちらほら出て
きたり、曜日や先週の交通量
を考慮する子も出てきたり
それなりに楽しんでいるよう



にも見えた。
 しかしながら、やはり子どもたちは飽きやすく、欲しがり屋さんだ。聞き飽きた台詞が今日も鼓膜を刺激してくる。
 「なんか飽きちゃった〜」
 「他のないの〜?」「なんか問題出してー!」「今日は何〜」
 これからも試行錯誤の日々、さて明日の登校はどうしようか。

園庭から

児童指導員 佐俣 浩代

つい先月まで園庭のあちこちでビューンビューンと二重跳びを競う音が鳴り響いていました。春休みに入り桜が満開の今は砂場が賑やかになつていきます。幼児、小学生低学年ときどき小学校卒業したてのお兄さん、お姉さんも交じり砂場にドーナツ状の堀を作り水をたっぷり入れて「流れるプールだあ」と裸足ではしゃいでいます。

春といってもまだ水は冷たいのですが、そんなことはおこまいなし。水が少なくなるのと彬の「水を持ってこい!」の号令に力自慢のほのかが口をへの字にしながらもバケツたつぷりの水を運び、「すごいでしょ」といわんばかりのどや顔。そんな遊びに入りたくて入りたくてウズウズの吉尚。前回その遊びに加わりとんでもないことになった(笑)そんなことから「入ってもいい?」と聞いてくる吉尚。「よくズボンを上げてね。昨日みたいにならないようにね」

とんでもないこととは、足を着けるだけでは我慢出来ず、体全体で浸かり、まるで泥沼の主のような姿で帰ってきたこと。

「こんなに汚して」と言つたものの吉尚の気持ちも解らないでもない。
 入浴時、吉尚に「楽しかった?」と聞くと満面の笑みで頷く。

今日の彬とほのかの家の大人たちの大変さは半端ではないだろう(笑)
 そんな夢中になれる事に対して無尽蔵に湧いて出てくる子どもたちのパワーについて見とれてしまう。

佐藤家から

主任児童指導員 池田 祐子

新しい年度が始まり、子どもたちも一つずつ学年が上がりました。

昨年度の終わりに、富士雄は家族の元へ帰り、そこで中学校入学を迎えました。

莉玖は倉澤家へ移り、高校入学を迎えました。

また、新しい仲間も加わりました。福5歳です。人見知り

りすることなく、やってきて早々に庭で元気に他の子たちと遊んでいました。

佐藤家の子ども達は、福がどんな子なのかな?と、様子を見ているようで、積極的に接していくことはありませんでした。日が経つにつれ、

「福、ちゃんと食べてるね」「福、そっちは行っちゃだめ」と、褒めたり、注意してくれます。「やあだ」と、言われたことをきかなかつたり、ちゃんと指で突いて逃げ、追いかけられ、キヤーキヤーと喜んだり、と関わってほしいという表現は多い福です。福も含め子どもたちが楽しい時間を重ねていけるような暮らしを作っていきたいと思えます。

竹花家から

保育士 田口 貴子

桜があつという間に散り、夏のような気温に体がついていかない今日この頃……。皆様はいかがお過ごしでしょうか。

それぞれが新生活スタート。新しいクラスに残念がる

子、喜ぶ子様々です。幼稚園の年長になった彩も、誰が自分のクラスの先生になるのかとワクワクしていました。

彩はとてもマイペースなので、元氣よく引つ張ってくれた先生が良いと私は思っていました。幼稚園とのお付き合いも長いもので、ある先生の顔を思い浮かべ、彩のいる食卓でもそう話していました。

当の彩はというと、その先生は「ヤダ」、優しい先生——去年と同じ先生が良いと話していました。

進級式当日、クラスに入り保育用品を整理していると担任の先生らしき人が色々と声を掛けてくれます。なんと、彩が「できれば避けたい!!」と思っていて、私が「ぜひお願いしたい!!」と思っている先生が担任になりました。私は心の中で万歳をしていました。先生の話を聞いている彩の表情には生気を感しませんでした(笑)

進級式の際にはげっそりした表情をしていた彩ですが、数日経つと「大きい机を運んだ!」「先生に頑張れって言われた!ばら組さんだからで

きる!」と楽しそうな表情を見せるようになりました。小学生への準備も始まる年長さん。沢山励ましてくれる先生に支えられて、大きく成長してほしいです。今年から弟の秀明も入園し、さらに張り切っているので、家でも成長を楽しみに励ましていけたらと思います。



→図書館でレシピ本を大量に借りてきた彩。好きな食べ物には「塩おにぎり」、作ってほしいお弁当は「玉子焼き」。(佐藤)

緊急特集! こどものつばき

紙幅に余裕ができましたので、ここで暮らしの中で生まれたおもしろいつばき、会

話をご紹介したいと思えます。

① 夕食、ほうれん草のソテーを見て……

「ほうれん草。ほうれん草そうってなんだっけ。報告、連絡、相談。『う』って何?」

② 1と同じ夕食中、ドレッシングのラベルを見て……

「これなんて読むの? ぶん、ぶん? ぶんぶんモンブラン?」
(正解…文部科学大臣賞)

③ たくさん食べた後で……

「おらのお腹はマンホール!」(ブラックホールと言いたかった)

④ 座っていたら「星座は何座?」と聞かれて……

「お母さん座り」。そっちなせいじゃない!

⑤ スマホ料金の話……

「今月、携帯代なんか高くなってるんだけど」
「スマホ決済とかで何か買ったからだよ」

「そっか。今度から気をつけ

するわ」
「気をつけるするじゃなくて、気をつけるだよ」

⑥ 砂場で裸足でお姫様ごっこをしていたら……

「えっ、狼にでも育てられたのかしら?」
「違うから!」

「えっ!?!つまり、ものけ姫って事!?!」
「ゾー(唸り声)」

⑦ 寒い朝の登校前……

「6枚も重ね着してる」
「十二単衣みたい」
「え?十人十色じゃね?」

⑧ アドバイスされて……

「そんなこと言われてもギツクリこない」
「腰?」
「じつくり?」
「ことごと?」
「みつくり?」
「しつくり?」

⑨ 粒あんよりも……

「マスタートドって」
「カスタードね」
「てりやきとって」
「たいやきね」

受容の相対性

副施設長 小西 剛史

『人との関係において、その長期的なベクトルは日常のちよつとしたきっかけで突如として別の方向に転換する、ということをおぼろげに察知する、それが経験してきました。それはいつも意図することが出来ない瞬間から始まります』

若干8歳の子どもと40過ぎのオジサン（わたくし）が年の差関係なく対等にぶつかり合う毎日。その兵、亜紀は朝から私の眠気を感情的に吹き飛ばしてくれず。その一例を分かりやすく箇条書きでお伝えしましょう。

①朝が苦手、布団から出られずなかなか食卓にやって来ない↓「遅れるから早く着替えて食べなさい！」

②食卓に来ると、テーブルに向って豪快にクシヤミ↓「手で口を押さえないさい！」

③寒さも苦手、登校時間が迫っているのにネックウオーマーや手袋をゆったり座って装備↓「手袋なんか歩きながら

でも出来るでしょ！」

④そして下校後↓「宿題やんねえ！」

⑤学校からは連日のように↓「授業に落ち着いて取り組むことができません……」

⑥夕食前、「そろそろご飯だからゲーム終わりに」→「ちよつと待つて」↓「終わりにしなさい」→「だからちよつと待つて」↓「ちよつと待つてよ」→「待つて待つてなんだろ」↓「いいかげんにしなさい(怒)」→「うるせえ、クソ野郎(怒)」……。

『子どもへの適切な声かけ、関わり方』なる学びを幾度となく繰り返し、なかなかどうして予定通りに行かないのが日々の暮らし。①～⑥のみに留まらず、さらに多様なやり取りを毎日のように繰り返してまいります！

そんなこんなで、朝から晩まで注意や小言ばかり。『少しでも良いところを認めてあげなければ……』と思いつつ、『良くできたね』など肯定的な声かけがなかなか出来ず、姿を見つけるとむしろマインナスを探してしまうかのよう。そんな日常に追われていたある日の休日。夕方、出先から戻ると園庭で遊ぶ亜紀の姿を発見！そして目が合った彼から一言、

「お誕生日おめでとう！」

「え？ありがと」

毎日怒られてばかりの亜紀、私のことなど『あんなやつ居なければいいの』と思っっているに違いない。そんな亜紀からの意表を突いたお祝い。誰かが言っていたのを真似して口にしただけかもしれない、でも何だか妙にうれしかった。そしてありがとと同時に『ごめんね』という感情が重なった。

その日の夕食、仙道家のメンバーや卒園生らが私の誕生日を祝ってくれた。亜紀も誕生会恒例の出し物、なぞなぞを一生懸命にやってくれていた。ある年齢からは年を重ねる事に対してネガティブな心情を抱きがちだが、誕生日を祝ってもらえるという事は、くつになっても嬉しいことで、子どもたちや仲間から心から感謝！

そして翌朝。朝支度。昨夜の宴。夢の跡の如き、同じ食卓にまた日常が戻る。

亜紀の行動は（当たり前だが）相変わらず……、そして注意に対する返答は暴言。しかしこれまでと変わらぬやり取りの中、注意先行でマイナスばかり目に付いていた私の心に和みの瞬間が訪れるようになっていた。

『イカン、イカン。こやつは注意ばかりの、につつき小西』を祝ってくれたんだ。見習って、もう少し広い心を持たねば！』と、肩の力が抜けていく。ここにきてからもう20回目の誕生日、また一つ成長させてもらえた気がします……子どもに。

良い感情のみで人との暮らしを営むことはできません。これからもきつと、いや必ずや、たくさんぶつかり合うこととしましょう。でも今思う事、それは夏草が生い茂る頃、次に訪れる彼の誕生日には心から『おめでとう』を伝えよう！

車を買う理由

児童指導員 佐藤 義岳

車を買うことにした。大学まで「東京右半分」にいて、車が必要なかった。雪深い上越での2年間も、除雪車と消雪パイプのおかげで、冬でも自転車で動けた。

大利根に越して5年間、休日はだいたい都内に出かけていた。自家用車を持つメリツトが維持費を超えらると思えなかった。

6年目になって気が変わったのは、第一に、施設内の体制が変わって不便が生じるようになったから。第二に、光の子どもの家だけではなく、地域に関わって生活してみようと思ったからだ。

この仕事は出勤日を振り替えることが多い。昨春秋、衆院選の選挙期間中に1日休みが増えた。「大人の社会科見学をしよう」と、選挙ボランティアに行つた。思いのほか楽しく、以前より政治を身近

に感じられるようになった。

住んでいる地域のことも知りたくなり、市議会議員に連絡をとって会いに行つた。子どもの教材費の話をしたら、「請願を出してみましよう」と言われた。

今年2月の定例会に請願を提出した。内容を大まかに書くくと、「加須市では小学生が学校で使う彫刻刀などを各家庭が買うが、自分を通つたり勤めたりした学校は、学校で用意したものをみんな使っていた。加須市も同じようにしてはどうか。義務教育だから家庭の経済的負担が少なくなるようにした方がいい」というものだ。

請願提出者は、請願を扱う委員会で見解を述べることができない。傍聴もしたことがないのに話すのも不思議だな、と思ひながら話した。

質疑は請願者ではなく、議会に請願を紹介した議員が対

応する。委員会室の端でメモを取りながら聞いていた。全体的に「請願の趣旨はいいが、コロナ感染予防が必要な今やるのは、方法と時期がよくない」という方向で話が進み、不採択となった。

質疑の中には、具体的に納得のいく指摘もあった。請願の本意がうまく伝わっていないとどかしく感じるものもあった。また、感染症対策について、それは有効で合理的だろうか？と疑問に思う部分もあった。

とはいえ、請願は真剣に扱われ、事前に調査もして議論に臨んだ議員もいた。そのことへの感謝を伝えたいと思つた。それに「趣旨はいい」のなら、どんな「方法」なら多くの賛同が得られたのか、それぞれ議員の考えを聞いてみたいと思つた。

いま、請願を扱った委員会の議員に連絡をとって、お話しする機会をいただこうとしている。幸いこちらは断続勤務だから、休日でも時間も作れる。ただ、大利根から騎西や北川辺の議員に会いに行くには、車がないと不便

だ。約束した日に大雨が降るかもしれないし。

4月は加須市長選があつた。インターネットを介して候補者への質問を集約し、答えてもらうという企画があつた。子育て支援も大切だが、子どもが自分の足で行ける居場所、遊び、学び、集い、何もしなくてもいい場を作つてほしいと送つた。

候補者の回答を聞き、幼児や親子を対象とする子育て支援には予算が付きやすいが、子どもが自ら選んで足を運ぶ居場所は、どこに何をどうやって作ればいいのかというイメージが共有されていないのではないかと感じた。

学生時代から関わっているプレーパーク（冒険遊び場）にせよ、現在は広く知られている子ども食堂にせよ、先に地域住民の活動が立ち上がり、認知され、行政に具体的な要求をして支援を得ることができるようになった。

この地域で活動している人のところに行き、話を聞いたり参加してみようと思つた。それで車を買うことにした。

日誌抄

2022年2月～3月

【4月1日の在籍児童数】

幼児 3名 小学生11名
中学生6名 高校生11名
その他1名 計 32名

【2月】

3日 節分、鬼が園庭に、子どもは窓から豆まき
4日 10年ほど前に卒業した沙織、仕事に悩み休職、しばらく滞在

21日 紅、生活拠点と通う場所が同時に変わるの不安という本人の意向で、高校卒業前に退所

24日 県立高入試、面接があった子は翌日も
25日 食堂にひな人形を飾る

【3月】

4日 県立高合格発表、入所予定者含め全員合格
8日 子どもに来年度の家編成、職員体制を説明

9日 女性職員宿舎裏に出たハクビシン?の駆除

12日 出発の会 お世話になった学校の先生、元担当職員などをお招きし、ささや

かに祝う

15日 職員1名がPCR陽性、濃厚接触者の検査、追加の陽性者はなし

16日 中3の美貴子が入所
18日 寄贈のエアコン取付、倉澤家のダイニングで10年活躍したエアコンを交換

22日 子ども1名がPCR陽性、濃厚接触者を順次検査、さらに子ども3名、職員1名が陽性(4月3日をもって全員隔離終了)

23日 富士雄が家庭引取
30日 萌愛措置解除 専門学校進学、アパート暮らしに5歳の福、入所

【委員会の主な動き】
運営 コロナ対応、職員採用、新年度体制検討

危機管理 コロナ対応、避難訓練
情報・通信 子どもスマホ購入(各社に事前見積依頼、ルール決め、契約同行)

学習支援、環境整備、食生活通常通り

【実習生受入】埼玉純真短期大学、埼玉県立大学、東京家政大学

飯塚幸次 大塚東一 小田祐治 金久保公男 工藤幸子 佐藤尚子 清水亨桐 滝口好子 戸田和歌 中島睦雄 丹羽吉康 根岸一広 野村三谷みき 谷口辰夫 山田智山田裕子 吉野久美子 渡辺幸子 渡辺みつる 内海哲也 ランドセル基金 (株)カーブス 古河下辺見店 (株)カーブス古河本町店 (株)カスミ 関東食糧(株) 久喜CAP 気仙沼ほてい(株) ゴールドバック(株) コンパスナビ 三育フーズ サンヨー缶詰(株) (株)サンヨー堂 静岡ジェイエイフーズ(株) すくすく広場 高橋会計事務所 (株)津田商店 (株)TSロジステイクス (株)なとり 東ベスト(株) 八戸協和水産(株) ホリカフーズ(株) 丸善食品工業(株) マルハン古河店 (株)マルユウ (株)やくらいフーズ (株)由比缶詰所

【ボランティア各位】(敬称略)
〈華道〉岡本有代 〈手芸〉山田智 山田裕子 〈学習〉常松洋介 向井進 〈保育〉荒巻潤子 他多数の皆様

【寄贈者各位】(敬称略)

飯塚幸次 大塚東一 小田祐治 金久保公男 工藤幸子 佐藤尚子 清水亨桐 滝口好子 戸田和歌 中島睦雄 丹羽吉康 根岸一広 野村三谷みき 谷口辰夫 山田智山田裕子 吉野久美子 渡辺幸子 渡辺みつる 内海哲也 ランドセル基金 (株)カーブス 古河下辺見店 (株)カーブス古河本町店 (株)カスミ 関東食糧(株) 久喜CAP 気仙沼ほてい(株) ゴールドバック(株) コンパスナビ 三育フーズ サンヨー缶詰(株) (株)サンヨー堂 静岡ジェイエイフーズ(株) すくすく広場 高橋会計事務所 (株)津田商店 (株)TSロジステイクス (株)なとり 東ベスト(株) 八戸協和水産(株) ホリカフーズ(株) 丸善食品工業(株) マルハン古河店 (株)マルユウ (株)やくらいフーズ (株)由比缶詰所

【ボランティア各位】(敬称略)
〈華道〉岡本有代 〈手芸〉山田智 山田裕子 〈学習〉常松洋介 向井進 〈保育〉荒巻潤子 他多数の皆様



感染症収束の見通しが立たないため
今年度もバザーは開催しません。

【発行】社会福祉法人 光の子どもの家 【住所】〒349-1155 埼玉県加須市砂原277
【電話】0480-72-3883 【FAX】0480-72-6649 【メール】hikarinoko@ceres.ocn.ne.jp
【Webサイト】http://www.hikarinokodomonoie.com/ 【振替】ゆうちょ銀行 00130-1-128022
【印刷】(株)エル・アートデザイン